

新方言としてのとりたて詞ゲナの成立：福岡方言における文法変化の一事例

松尾, 弘徳
鹿児島国際大学国際文化学部講師

<https://doi.org/10.15017/19773>

出版情報：語文研究. 107, pp.1-17, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

新方言としてのとりたて詞ゲナの成立

—— 福岡方言における文法変化の一事例 ——

松尾弘徳

はじめに

共通語の影響で全国的に方言差が縮まってきている一方で、若い世代が新たに使用するようになった方言語形が存在することが近年指摘されている。それらは「新方言」などと呼ばれ、各地域における具体例の紹介もなされてきている。

さて、そのような新方言の福岡における一例とされる表現に、「数学げな嫌い。」に見られるような「ゲナ」というものがある。このゲナの現時点での分布状況、および新方言として成立するに至った過程を明らかにしたいというのが本稿の目的である。特に後者の成立過程の考察に主眼をおいて以下論じてみたい。

1. 九州方言のゲナ

里に〈げな〉といふ詞は（中略）ふるく「何げなる」といへりける詞よりいで、二三百年のまへまでは、すぐに「めり」といふ詞にあつべく用たりけるを、このごろはたゞきゝつたえたることにかぎりて、歌によまば「てふとなん」などいふことにあつべきやうになりたれば、なかへまぎらはしくやとて、今はあてず。（富士谷成章『あゆひ抄』、下線稿者）

上記の『あゆひ抄』の記述に見られるように「ゲナ」という語は伝聞の意を表し、近世期には中央語でも用いられていたと考えられる^(注1)。また、この語は『九州方言の基礎的研究』（「伝聞の文末」p.108）に示されているように、現代においても伝聞を表す文法形式として九州一帯に広く分布しているようである。^(注2)

(1) その家で赤ん坊が生まれたげな。：『九州方言の基礎的研究』調査文例

このゲナの福岡県方言における状況を見てみると、1986年の調査による『福岡県域言語地図』（図26）では、老年層においては筑後、筑前、豊前南部域に

伝聞形式として分布しているが、若年層においてはやや使用範囲が狭まり、筑前東部域などで伝聞ゲナが見られなくなっていることがわかる。後述するが、稿者が行った調査においても、20才前後の若年層の伝聞ゲナの使用は、福岡市周辺域においては衰退しつつあるようである。

ところが、このゲナという形式には近年新しい用法の存在が指摘されている。それは、次のような用法である。

- (2) ナンデ 数学ゲナ セナ イカン トー。イッチョン スカン。(なぜ数学なんかしなければならぬの。大嫌い!)〈福岡市、女子中学生〉
：岡野 (1988)
- (3) ひろし：こげな所げな聞いとらんばい！(ひろし：こんな所なんて聞いてないよ!)：「あなたにも使える博多弁講座」
(<http://www.ronax.net/hakata/lesson07.htm>)
- (4) バス停なんかまだ小字名で残っているよね、笹山もそうだし。趣があってよいね、波多江駅北げな無機質でなんか親近感沸かないですね。：「福岡県糸島地方・前原市・志摩町・二丈町・について 其の十四」
(<http://kyusyu.machi.to/bbs/read.pl?BBS=kyusyu&KEY=1129546983>)
- (5) 方言ばださんごとしゅーちちおもとつても「来る」やら「が」ば「の」ていってから後で言い直したり日本語の不自由になるけん、あんまり方言げなしらんほうがよかつちやよかつばい：「博多弁を話したい！」
(<http://academy6.2ch.net/test/read.cgi/gengo/1076768994/>)

(2) は先行研究にて指摘された例、(3)～(5)は稿者がウェブで検索した例(採集日2007年8月1日)であるが、本稿ではこのような伝聞形式と見ることができないようなゲナについて、その用法と分布状況を整理し、その上で新方言ゲナの成立過程の考察を行ってみたい。

2. ゲナの新用法

前節(2)～(5)であげたゲナは、(九州方言に広く見られる)伝聞を表すゲナとどのような点で相違があるのだろうか。そこで、本稿では伝聞ゲナを「ゲナ₁」、新しく発生したと考えられる(2)～(5)のようなゲナを「ゲナ₂」と区別して、特にゲナ₂の用法について考えたい。

ゲナ₁とゲナ₂を比較したときの大きな違いは、その構文的出現位置にある。

ゲナ₁は、ヨ・ネ・バイなどの終助詞類以外はゲナの後には後続できず、したがってその出現位置は専ら文末である (cf.(1))。それに対して、ゲナ₂の後には、その文の述語が続く (間に述語を修飾する副詞などを挟む場合もある)。かつ、その述語は「好きではない」(cf.(2))、「聞いていない」(cf.(3))など否定表現や否定的ニュアンスを伴うものに偏りやすい。^(注3)

この事実をもとに、ゲナ₁とゲナ₂の文法的役割を整理してみる。

ゲナ₁は終助詞類以外が後続できないことから、助動詞相当の文法的役割を担う。また、伝聞という意味を表すことからゲナ₁は「伝聞の助動詞」と言えよう。共通語で置き換えると、「ラシイ」「(ダ)ソウダ」などが該当しそうである。

一方、ゲナ₂は、後ろに述語成分が来ることから、助詞相当の文法的役割を担うと考えられる。またゲナ₂の担う意味を考えたとき、その基本用法はあるものを否定的にとりたてる (そして後続する述語はその取り立てた事柄に対して評価を加える)「否定的特立」^(注4)という機能であると考えられる。(2)を例にとるならば、「数学」というものを特立させ、その「数学」に対して否定的な評価を加える、という構造になっていると思われる。ここで特立される「数学」は、発話者にとって好ましくないものや不得手なものである。岡野(1988)ですでに述べられているとおり、このような意味用法を持つゲナ₂は、共通語では「トカ」「ナンカ」「ナンテ」に相当するようである。このようなとらえ方が正しいとすると、ゲナ₂は近年精力的な研究が行われてきている「とりたて詞」に該当しよう。

以上、ゲナのもつ2つの用法を記述してきたのであるが、ゲナ₂に当たる用法を稿者は用いることはない。^(注5)次節にて詳述することになるが、ゲナ₂は、比較的最近になって使用されるようになった用法である。しかも、その使用地域はゲナ₁とは異なり九州のごく一部に限られるようである。

3. ゲナに関するアンケートから見えてくること

前節で紹介した新方言ゲナ₂がどのような地域で用いられ、その使用層がどのようなものであるのかを探るために、稿者は平成19年(2007年)の夏から秋にかけて次頁のような調査票を用いたアンケート調査を行った。

調査対象は次頁の通り。イ・ロはゲナ₂使用が見られるであろうと予想した10~20代の若年層の状況を見るために、またハ・ニは若年層データとの比較を目的として、30代以上のゲナ使用の状況を見るために調査した。

- イ. 九州大学国文科所属の学部生・大学院生 : 15名
 - ロ. 稿者が非常勤講師として出講していた福岡県内の大学の学生 : 50名
 - ハ. 筑紫日本語研究会の会員（主として九州各県の大学の教員） : 14名
 - ニ. 九州産業大学付属九州産業高校（福岡県筑紫野市）の教員 : 8名
- （総計：87名）

以下、世代別・出身県別の各人数を載せておく。

世代別：10代25名、20代49名、30代4名、40代4名、50代4名、60代1名

出身地（県別）：福岡61名、佐賀3名、長崎3名、熊本3名、大分3名、宮崎3名、鹿児島3名、山口5名、広島1名、鳥取1名、兵庫1名

まず、次頁に1986年調査の『福岡県域言語地図』の調査項目「勉強なんか大嫌い」（図21）の結果を引用する。今回のアンケート結果との比較のため参照されたい。

【「ゲナ」調査用紙】

1. あなたは方言を使って地元の友人などと会話をするとき、「ゲナ」ということばを使いますか？

例1 この前、あそこのため池で子供が溺れたゲナ。

2 あ〜、会社辞めて世界一周旅行に行くゲナ、夢のある話やねえ。

3 数学ゲナ、好かん。

「使う」と答えた方は以下の設問にお答えください。

2. ゲナを文末で用いますか？（例1）
3. ゲナを文中で用いますか？（例2・例3）
4. まったくゲナを使わない人に対してあなたがゲナの用法を説明するとしたら、どのような用法と説明しますか？

さて、今回のアンケートによる調査結果は下の通りであった。

- ・ゲナ₁（伝聞の助動詞）を使用する : 41名
- ・ゲナ₂（とりたて詞）を使用する : 22名
- ・ゲナ₁・ゲナ₂とも使用 : 18名
- ・ゲナ₁のみ使用 : 23名
- ・ゲナ₂のみ使用 : 4名

なお、このアンケートにおいて、被験者から次のようなゲナ₂の例文が得られた。

(6) 納豆ゲナ食わんよ。(25才 男性・福岡市)^(注6)

(7) そんなことがあったゲナ、知らなかった。(22才女性・福岡市)

ここではアンケート結果の詳述は避け、下記の点にポイントを絞って論述したい。

- ① ゲナ₂を使用するのは九州のどのような地域か。
- ② ゲナ₂の使用層はどのような年代か。
- ③ 新しい用法と考えられるゲナ₂のみを使用するというケースがあり得るのか。

①について

福岡市10名、宗像市2名、福津市、宮若市、飯塚市、朝倉市、久留米市、小郡市、うきは市、柳川市 各1名

と、圧倒的に福岡県方言話者が多い。福岡市をはじめとする筑前西北域、筑後地方に使用者が広がっているようである。これは、前掲『福岡県域言語地図』(図21)の調査データと一致する。

そのほか、佐賀県でのゲナ₂使用者が2名いた。1名は鳥栖市の生え抜きであり、この地域は久留米市などゲナ₂使用が見られる福岡県の筑後域に隣接しており、これらの地域からの影響関係が想定される。また、もう1名は佐賀市出身の31才女性であるが、「(大学入学以降)福岡(市)に来てから使うようになった」との補足情報が記されており、今のところゲナ₂の使用域は福岡県内にほぼ限定できるのではないかと考えられる。

②について

ゲナ₂使用者22名のうち、18～25才の若年層が20名を占める。これは、この世代の被験者が多数であるための偏りの可能性もあるが、『福岡県域言語地図』の調査結果を考えあわせると、ゲナ₂は若年層ほど使用率が高いものと推定される。

この点に関して、次のような補足情報が参考となろう。

「ある時、親に①(本稿のゲナ₁・稿者注)の使い方は正しいが、②の使い方

(本稿のゲナ₂・稿者注)は間違っとなると怒られた記憶がある」(23才男性・福岡市)

③について

ゲナ₂のみ使用すると回答した被験者4名の内訳は次の通り。

18才女性・福岡市／19才女性・宗像市／20才女性・福岡市／21才女性・福岡市

このように、ゲナ₂のみを専用する被験者は、若年層かつ福岡市およびその近隣域(筑前西北域)に限られており、ゲナ₁およびゲナ₂使用率の比較的高い筑後域において、ゲナ₂のみを用いると回答した被験者は一人もいない。

詳細な調査を進めていない段階での推定は避けるべきではあるが、今のところゲナの分布に関して、稿者は次のような見通しを立てている。

- (8) 福岡市を文化的中心とする筑前西北域においてゲナ₁は衰退しつつある。それに対してゲナ₂は若年層において頻用される新方言である。筑後域においては、ゲナ₂とともに、ゲナ₁の若年層使用率もいまだ高い状況にある。

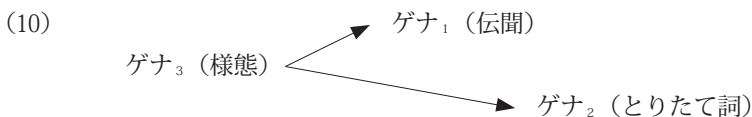
4. とりたてて詞ゲナの成立過程

4.1 岡野(1988)で提示されたゲナ₂生成に関する仮説

さて、ここまで新方言とされるゲナ₂の分布状況を述べてみたのだが、とりたてて詞的用法を持つゲナはどのようにして成立したのであろうか。ゲナ₂の成立について論じられているのは、管見の限り下の岡野(1988)の記述のみである。

- (9) 「ところで小・中学生、高校生たちは、冒頭にあげた文に見られるように、「学校ゲナ…」、「数学ゲナ…」のように「なんか」相当の「ゲナ」を言いはじめた。これは「学校ノゲナ 所」「数学ノゲナ 勉強」の省略であろう。そのものに対する拒否の心情を訴える時にのみ、様態の「ゲナ」を言うのは、伝聞のばあいに「イタチ ゲナ」といった用法を見せていたのと同類である。」
：岡野(1988) p.229

これによると、岡野は(10)のようなモデルを想定しているように思われる。以下、ゲナの様態用法を「ゲナ₃」として、図式化して^(往7)みる。



岡野は前掲『福岡県域言語地図』の老年層の調査から得られた「ベンキョーノゲナモノ」(地点番号42・鞍手郡若宮町・明治41年生)「ベンキョーゲナモン」(地点番号41・鞍手郡宮田町・大正7年生)「ベンキョーゲナツ」(地点番号55・嘉穂郡筑穂町・大正15年生)などの、様態を表すゲナ₃からとりたて詞的用法のゲナ₂が派生したという考え方であるが、しかしながら、このモデルでは「様態用法がなぜとりたて詞へと変化し得たのか」を説明できないように思われる。

(10)のモデルの妥当性を主張するためには、「N₁(ノ)ゲナN₂」のN₂が省略される理由を説明する必要があるが、この点を岡野(1988)が明示しているとは言い難い。

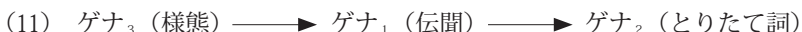
また、ゲナの様態用法は、老年層においても活発な用法とは言えない。九州においては、様態用法でゲナを使うことはあまりなく、特に若い層においてはアンケート結果から考えてほぼ用いられていないと考えられる。このことから、ゲナ₃とゲナ₂を直結させて考えることは難しいように思われる。

さらに、とりたて詞ゲナは、文相当句をとりたてることができるという特徴がある。本稿アンケートで被験者から挙げられた「そんなことがあったゲナ知らなかった。(22才女性・福岡市)」といった例文からわかるように、ゲナ₂は文相当句を取りたてることが可能である。様態用法から派生したとする考え方では、この点に関しても説明が難しい。

次節では、ここで指摘した問題点にうまく答えられるようなゲナ₂生成に関する仮説を提示してみたい。

4.2. 伝聞の助動詞から引用マーカ―へ

本稿では、「ゲナ₂は九州方言で広く用いられているゲナ₁から派生した用法である」との見解に立ち(モデル(11))、ゲナ₂の成立過程について述べることにする。



稿者はゲナ₂の出自をゲナ₁と考えるのであるが、それを可能にしたのは、ゲナ₁から派生した次のような用法を仲立ちにしたからこそであると考ええる。

(12) (ちょっと聞いてよ！太郎ったらさっき、社長に向かって、)「俺、会社辞めて世界一周旅行に行く。」ゲナ。：坪内(2004)

(13) 「○○さんが私に仕事しろ」ゲナ言うよ。：(21才女性・福津市、本稿アンケート)

このようなゲナは、その場にいる相手や、その場にはいない第三者のそれまでの発言をそのまま、あるいは要約して取り出したことを、ゲナを用いて表現している。つまり、一種の「引用マーカー」としての機能を有していると考えられる。このような引用マーカー的役割を担うゲナを「ゲナ₄」とする。

(12) にあげたゲナ₄は、伝聞形式を用いた「太郎は会社辞めて世界一周旅行に行くゲナ₁」と、話者が伝えたい内容自体はさほど変わらないと思われる。発話内容をいったん話者が受け止めて内容を整理した形で伝えるか(=伝聞)、そのままの形で提示するか(=引用)、という違いとも考えられるが、じつはこの差はそれほど明確なものでもなく、ここに「伝聞」^(注8)と「引用」とが同じ形式でも表現可能となる可能性が生じるものと思われる。たとえば現代共通語においても、伝聞形式と引用マーカーが共通の形式で表現される場合がある。

(14) a. 彼は今でもどこかで生きているトイウ。

b. 彼が今でもどこかで生きているトイウ噂は本当だろうか。

(15) a. 明日は学校休みだッテよ。

b. 「明日は学校休みだ」ッテ先生が言った。

いま、上記(14)(15)の用法の時代的先後関係は問わないこととするが、このように「伝聞」と「引用」というものが共通の形式で表現される場合があり、とすると、それまで伝聞を表現する形式であったゲナ₁が、ゲナ₄のような引用マーカーとしての機能を持ち得る可能性は十分にあり、(12)(13)のゲナはそのようなケースであると思われる。

このゲナ₄の段階に至って、それまでもっぱら文末位置に現れていたゲナ₁が文中に現れることが可能となり、とりたてて詞的用法を派生する下地が整ったことになる。ちなみに、近世中央語の伝聞ゲナは引用マーカーとしての用法はな

く、もっぱら文相当句の外側に付接していたようである。^(註9)

4.3. 引用マーカーからとりたて詞へ

先の節で述べた、引用マーカーのゲナを用いた構文は下のように図式化できる。

(16) 「引用部分」+ゲナ₄ 述部

この構文における述部は、(13)のように基本的には「言う」「話す」「呼ぶ」などの発話を表す述語であり、そのことが「引用部分」+ゲナ₄が「引用」であることの見印となるわけである。しかしながら、この例は別の見方も可能である。

(13) 「○○さんが私に仕事しろ」ゲナ言う₁とよ。：再掲

それは「私に仕事をしろ」という相手の発話を「とりたてて」、そこに（この場合、このようなことを言われたという）否定的な判断を下しているという解釈である。坪内（2004）にあげられた次の(17)の例も、前掲(12)に続く発話である時は引用構文ととれるわけだが、^(註10)これとは別に「世界一周旅行に行く」という事柄をとりたてて、それに対して「夢のある話だ」という判断を下しているという解釈も可能である。

(17) あ～、会社辞めて世界一周旅行に行くゲナ、夢のある話やねえ。（あ～、会社辞めて世界一周旅行に行くなんて、夢のある話だねえ。）：坪内（2004）

cf. (12) （ちょっと聞いてよ！太郎ったらさっき、社長に向かって、）「俺、会社辞めて世界一周旅行に行く。」ゲナ。：再掲

ゲナのとりたて詞的な用法は、もと伝聞用法として文末に用いられていたゲナが、引用マーカーとして用いられるようになった後に、(13)(17)のようなゲナを再分析することで生じた用法であると考えられる。

このようにとりたて詞として解釈されたゲナ₂は、述部部分に変化が生じたものと思われる。^(註11)それまで、発話に関わる述語に限られていたものが、ゲナ₂

として再分析されたとき、評価を表す述語と共に起するようになる。『福岡県域言語地図』の調査項目「ベンキョーゲナ イッチョン スカン」、また二階堂(1997)の調査項目「ピーマンゲナ キライダ」などは、まさに評価を表す述語を用いており、このような表現が若年層・少年層において使用されているという両調査結果は、ゲナがとりたて詞用法を新たに持ち得ていることを端的に示しているのである。

また、ゲナが、とりたて詞という助詞的役割を担い得たもう一つの理由として、次の点も見逃せない。

(18) ゲナ₁は不変化助動詞である。

青木(2007)はこの点に着目し、後期抄物においてゲナが文末専用の「不変化型」として用いられていることをもって、ゲナのモダリティ形式としての成立に結びつけている。ゲナ₁は九州方言においても不変化助動詞として用いられており、そうであればこそ、文中で引用マーカーとして用いられても語形変化を生じない。このことが、ゲナを一種の助詞として再分析させる一契機となったと考えられる。

なお、ゲナ₂を使用しない話者は、これをとりたて詞と認めてよいのか(文中で用いられるゲナは、すべて引用マーカーではないのか)という疑問もあるのではないだろうか。以下、ゲナが若年層においてとりたて詞的性格を有している根拠をいくつか提示したい。

1点目は、ゲナ₂が「否定的特立」という、共通語のとりたて詞「など」「なんか」「なんて」に近い性質を有していることである。引用マーカーの段階では、評価語と解釈できる述部と共に起した場合、その評価のプラスマイナスは問われないはずである。

しかしながら、ゲナ₂使用者への聞き取りによると、下のような例文においては「日本語の研究」というものを蔑んでいる時に用いやすいとのことである。

(19) (相手が「私は日本語の研究をしている」と発言したことに対して)

日本語の研究ゲナ、やっとなー。(日本語の研究なんて、してるんだ。)

引用マーカーであれば、このように特定の評価に偏る必然性はない。特定のものをとりたて、強調するという「とりたて詞」的機能を有しているからこそ、

特定の（ゲナの場合否定的な）評価語を要求しやすくなるのであろう。

2点目は、助詞への後接である。沼田善子氏による一連のとりたて詞研究では、その統語的特徴として「任意性」があげられている。氏は(20)のような例をあげながら、とりたて詞の「任意性」を(21)のように定義する。

- (20) a. 割引券を常連客に だけ／ \emptyset 渡した。
b. おスケさんに くらい／ \emptyset 本当のことを言えばよかった。
- (21) 構文論的な観点から見て、一文の構成に直接関与するか否かで言えば、否である。つまりとりたて詞は任意の要素である。この特徴がとりたて詞の任意性である。：金水・工藤・沼田(2000) p.156

ゲナ₂も使用者によっては「とりたて詞の任意性」を持っているようであり、ゲナが一部の助詞に後接することを許す。^(註12) 下の(22)(23)は、ゲナが引用マーカではなく、とりたて詞として機能することを示している。

- (22) (食べているお菓子がほしいと言ってきた弟に対して)
お前にゲナ やらん。(お前になんか、あげない。)
- (23) (朝礼終了後にいつも1組から退場する様子を、8組の生徒が見て)
いつも1組からゲナ ずるかー。(いつも1組からなんて、ずるい。)

4.4. 「ギャウナ」を出自とする「ゲナ」

ここまで、ゲナのとりたて詞的用法（ゲナ₂）が、伝聞用法（ゲナ₁）から引用マーカとしての用法（ゲナ₄）を経て成立したことを述べてきたが、これに加えて引用マーカからとりたて詞を派生させる後押しとなったと考えられる語について述べたい。それは、次のようなゲナである。

- (24) 「お前」ゲナ言い方するなよ。(52才男性・宮若市、本稿アンケート)

このゲナは、「～のような」といった意味を表し、歴史的には「～ギャウナ」に遡れるものである。典型的には指示詞に後接して「コゲナコト」「アゲナ人」「ソゲナ格好」のように用いられるのであるが、(24)のように話者によっては指示詞以外の一般名詞にも後接可能のようである。^(註13) このように考えたとき、4.1.で取り上げた『福岡県域言語地図』の老年層調査の回答「ベンキョーノゲ

ナモノ」「ベンキョーゲナモン」「ベンキョーゲナッ」などは、岡野（1988）が考えたような様態ゲナ₃ではなく、ガヤウナ出自のゲナである可能性が出てくる。様態用法のゲナであれば、前接語は「暑げな格好」のように形容詞語幹であるべきで、名詞に自由に後接することは考えにくい。

(24)をモデル化した「N₁ゲナ N₂」は、「N₁のような N₂」といった意味を表す。(24)は「お前のような言い方」という意味であるが、これは「お前」という言葉そのものずばりを指し示すのではなく、いわば例示に近い意味を持つ。引用マーカーとして文中で使用可能となり、とりたて詞として再分析される可能性を生じたゲナ₄が、このガヤウナ出自の例示の意味を持つ「ゲナ」の関与を受け^(注14)たとき、ゲナは例示機能をもつとりたて詞的な語と解釈されるようになったのではなかろうか。

つまり、ゲナ₂が成立した背景には、構文的側面としてはゲナ₄を仲立ちとする必要があるが、このゲナ₄に加えて、連体修飾用法として働く「ガヤウナ出自のゲナ」も意味的にとりたて詞への用法変化の後押しをしたものと思われる。

このように想定すると、ゲナ₁が広く見られる九州において、福岡方言のみにとりたて詞的なゲナ₂が生じている理由も説明しやすくなる。『方言文法全国地図』第1巻第8図「そんなことを言うな」の「そんな」に該当する部分の、九州地方における語形の概略を下に示す。

- | | |
|----------|---------|
| (25) ソゲナ | : 福岡 |
| ソゲン | : 大分 |
| ソガン | : 熊本 |
| ソギャン | : 長崎、佐賀 |
| ソングナ | : 宮崎 |
| ソゲン、ソゲナ | : 鹿児島 |

このように、「～のような」を「ソゲナ」という語形で用いる地域は福岡に限られている。「～ガヤウナ」を「～ゲナ」形で表すために、当該地域において「ガヤウナ出自のゲナ」と、ゲナ₄との意味用法の同一視が生じ得たのではなかろうか。^(注15)

4.5. 助動詞から助詞へ変化した類例

本稿で推定したゲナ₁からゲナ₂への流れは、品詞論の観点から見ると「助動詞から助詞へ」という変化をゲナが遂げたことになる。ここでは、そのような助動詞から助詞へという変化が生じた類例を紹介し、本稿で立てた変化過程が相応の蓋然性を持つことを示したい。

- (26) 田中なり山口なり (学生) を呼んでこい。
(27) 田中やら山口やら (学生) を呼んできた。
(28) 立ったり座ったり (意味のない事) を繰り返す。

:すべて Kinuhata et al (2006) より

これらナリ・タリ・ヤラ (<ヤラン<ニヤアラム) はもともと助動詞相当語句として機能していたものであるが、現代においては例示並列機能を持つ助詞(とりたて詞)相当の機能を有している。この変化に関するプロセスは、Kinuhata et al (2006) および岩田 (2007a) において詳細な検討が加えられており本稿では変化が生じたという事実を紹介するにとどめるが、このようにいわゆる助動詞相当のものが、何段階かのプロセスを経て助詞相当のものとなるという変化はゲナに限ったことではないことが、このような類例からも確認できる。^(注16)

以上、第4節にて主張したゲナの用法変化のプロセスは、次のような変化モデルとしてまとめられる。

- (29) ゲナ₃(様態) → ゲナ₁(伝聞) → ゲナ₄(引用) → ゲナ₂(とりたて詞)
ガヤウナ出自の N₁ ゲナ N₂の意味的関与

5. まとめ

以上述べてきたことを整理し、本稿のまとめとしたい。本稿ではまず、アンケート調査により得られたゲナのとりたて詞用法(ゲナ₂)の使用状況を紹介した。ここでわかったことは、主に福岡県筑前西北域の若年層においてゲナ₂の使用が顕著であるということである。特に福岡市方言若年層話者の一部は、ゲナを伝聞用法(ゲナ₁)では用いず、もっぱらとりたて詞として用いており、方言文法研究において興味深い事例であると考えられる。

また、アンケート結果に続いて、ゲナ₂の成立のプロセスに関して検討を加

えた。その中で述べた変化モデルは前掲(29)のようなものであった。

このモデルのポイントは、先行研究では様態のゲナ₃から派生したとされていたとりたて詞的なゲナ₂が、引用マーカーのゲナ₄を仲立ちとして伝聞のゲナ₁から派生したと考えた点である。なお、ゲナ₄からゲナ₂への派生にあたっては、ガヤウナ出自のゲナの意味的関与も想定される。

4.1 節で述べたように、「ゲナ₂はゲナ₃を直接の起源とする」とする岡野(1988)の立場で説明できなかつたのは次のような点であった。

- (30) a. 「N₁ (ノ) ゲナ N₂」の、N₂の省略がなぜ生じたのか
b. ゲナの様態用法は、老年層においても活発な用法とは言えない
c. とりたて詞ゲナは、文相当句をもとりたてることができる

とりたてゲナが、伝聞ゲナから派生したとする本稿の立場に立てば、以上の問題点に対して妥当な説明を加えることができる。伝聞ゲナは助動詞相当であるため、文相当句に下接しても全く問題ない。このことから名詞の省略を想定する必要もなく (cf.(30a))、また当然ながら文相当句を取り立てることも可能である (cf.(30c))。さらに、様態用法との直接的関係を考える必要もない (cf.(30b))。

九州方言、就中福岡県方言のゲナの使用状況、および各用法間の連続性からしてもこのように考えるべきなのではないだろうか。

注

- (注1) 中世・近世の中央語における「ゲナ」の用法については、仙波(1972)、前田(1993)、山口(1997)などを参照のこと。
- (注2) 特に福岡・長崎・鹿児島・宮崎の各県において広範に亘る使用が見られる。
- (注3) 岡野(1988)はこの点に関して、「拒否の心情を訴える時にかぎって用いる」(p.228)と述べている。
- (注4) 「否定的特立」の用語は、金水・工藤・沼田(2000)に従う。否定的特立とは、あるものごとを否定的な意味で強調する用法である。そのため述部には、好ましくないことを示す形容詞類や否定表現を伴うことが多い。
- (注5) 稿者は1974年生、18才まで熊本県荒尾市(福岡県との県境、福岡県大牟田市に隣接し、文化的関係から筑後方言の影響が強い)に在住、大学入学を機に福岡市に移住した。荒尾市在住時にはゲナ₁のみを使用していた。よって、ゲナ₁の用法に関するインフォーマントは稿者自身であるが、ゲナ₂の用法記述については、ゲナ₂使用者への聞き取りや、ウェブ上の検索で見つけたもの、あるいは岡野編(1987)・岡野(1988)・二階堂(1997)などの先行研究にあげられた例をもとに

している。

- (注6) 被験者の年齢はアンケート回答時のもの。以下同じ。
- (注7) 現代方言において、ゲナを様態の意味で専ら使用する地域も存在する。「あの人は夏だにセーターなんぞ着て、なんちゅう暑ゲナ格好しとるだらあか。」(鳥取県東伯郡、本稿アンケートより)
- (注8) 引用と伝聞との関わりについては、藤田(2000)など、藤田保幸氏による詳細な研究がある。
- (注9) 青木(2007)では、活用語の終止連体形に接続するゲナを「外接モダリティ形式」と呼んでいる。引用マーカーに近いゲナが中央語になかったかどうかについては、今後調査を進めたいと考えている。
- (注10) 坪内(2004)自身は、引用構文の例として(17)を挙げている。
- (注11) このことを裏付けるためには、ゲナを文中で使用する話者に対して、どのような述部で使用可能かを確認する必要がある。この点については、今後詳細な聞き取り調査を行う予定である。
- (注12) ゲナ₂がどのような助詞類と共起可能であるのか、あるいは承接順序はどのようなものであるのかについては、稿を改めて論じたい。
- (注13) (24)の回答者でもある、高山倫明氏(九州大学大学院教授)の内省による。
- (注14) この過程において、福岡方言の「ガヤウナ」出自のゲナのもつ構文的側面(連体修飾に限る)は捨象されたものと考えられる。
- (注15) ただし、これはあくまでも「変化の後押し」に過ぎず、ゲナ₂の直接の起源はゲナ₁であると稿者は考えている。
- (注16) ここで紹介した助動詞相当語句と全く同じプロセスを、ゲナに適用できるわけではもちろんない。前述のように、ゲナが持つとりたて機能は「例示」ではなく「否定的特立」であり、安易な結びつけは危険であることを承知した上での議論であることをことわっておく。

[参考文献]

- 青木博史(2007)「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』pp. 205-219 ひつじ書房
- 岩田美穂(2007a)「例示を表す並列形式の歴史的变化——タリ・ナリをめぐる——」『日本語の構造変化と文法化』pp.93-113 ひつじ書房
- (2007b)「ノ・ダノ」並列の変遷——例示並列形式としての位置づけについて——『語文(大阪大学)』89、pp.48-58
- 岡野信子編(1987)『福岡県域言語地図』梅光女学院大学方言研究会
- 岡野信子(1988)『福岡県ことば風土記』葦書房
- 九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店
- 国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図(1)』大蔵省印刷局
- 陣内正敬(1993)『地方中核都市方言調査報告——福岡市・北九州市——』九州大学言語文化学部日本語科
- 仙波光明(1972)「終止連体形接続の「げな」と「そうな」」『佐伯梅友博士寿寿記念国語学論集』表現社、pp.513-535

- 坪内佐智世 (2004) 「伝聞」の「そうだ」とそれに対応する福岡市博多方言の伝聞形式
『福岡教育大学紀要』53-1、pp.41-50
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 友杉めぐみ (未公刊) 「福岡県地元在住者と他県移住者の「ゲナ」用法比較～福岡方言
「ゲナ」の変遷と若年層の使用法～」平成16年度福岡女学院大学卒業論文
- 二階堂整 (1997) 「福岡 JR・西鉄沿線グロットグラム調査」『西日本におけるネオ方言
の実態に関する調査研究』(平成8年度科研基盤A報告書 代表 阪大 真田信治)
pp.72～82
- 沼田善子 (1988) 「とりたて詞の意味再考——「こそ」、「など」について——」『論集 こ
とば』くろしお出版
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 前田桂子 (1993) 「江戸喃本におけるゲナとサウナ——伝聞の例を中心に——」『筑紫語学
研究』No.4、pp.8-20
- 山口堯二(1997) 「助動詞の伝聞表示に関する通史的考察」『京都語文』2、pp.202-222
- Kinuhata Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui (2006)
“Genesis of Indeterminate Pattern in Japanese” The 16th Japanese/Korean
Linguistics Conference, Kyoto University, 2006年10月7日発表資料

〔付記〕

本稿は、第216回筑紫日本語研究会および第87回国語語彙史研究会（於大阪大学）での
口頭発表を基に加筆・修正したものである。発表の席上、多くの有益なご教示を賜った。
また、本稿はアンケート調査にご回答下さった被験者の方々との協力を得ている。ここに記
して感謝申し上げる。

なお、本稿は平成20年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。

（まつお ひろのり・鹿児島国際大学国際文化学部講師）